

“ロータリー今昔”

RI第2590地区パストガバナー 津田 進

最近のロータリーでは、現在いくつかの大がかりなプロジェクトに取り組んでいます。新しいプランも次々と打ち出され、会長は21世紀への夢を語り、ロータリーは花ざかりのようである。

しかし、ロータリーを知るためには、初期のロータリーを合せ鏡にしないと、立体的には見えてこない。時の流れのなかで、何が不変で、何が変わりゆくものであったかを、はっきり見極めないと、実は今のロータリーを分かったことにはならないでしょう。

まず、1905年にポール・ハリスがシカゴで3人の友人と、ロータリークラブの原型的な集まりを開いた、その辺の時代背景から話さなければなりません。当時のアメリカは、18世紀半ばにイギリスで始まった産業革命の影響をまともに受けていた時代です。農園労働者が大都市周辺の工業地帯へどんどん移動し始めていた時代でした。農園労働者が大都市へ、工業地帯へ移っていくという流れはあまりにも早すぎ、そのため人口の大量の都市集中化が起ったわけですから、都市計画が追いつかない。行政機能が麻痺するという事態が続いた。一方、工業生産に携わっている企業家の間には激烈な競争が始まっていました。そのために労働者の福祉などは無視して、企業家自身の利益のみを追求する風潮がみなぎっていた。特にシカゴ

はそれがひどかった。そんな中でシカゴで弁護士を開業して間もなかったポール・ハリスは、仕事の方は順調だったけれども、少しも満ち足りた気持ちになれませんでした。とうとう少年時代を祖父母のもとで過ごしたニューイングランドへ、旅仕度もそこそこに出発します。自分が青少年時代を過ごした人口1,000人足らずの、ウォリングフォード村へ近づくにつれて、過ぎ去った日々を思い出させてくれるのどかな風景が次々と目の前に現れてきます。ポールを引きとって育ててくれた祖父母は、規律正しい生活を送りながら自己犠牲に富んだ高い理想を追う敬虔なピューリタンでした。今は墓標の下に眠る2人の懐かしい芸術家たちが、粘土に形を与えるように自分を形造ってくれていたことに、その時ポールは気付くのです。

彼は再びシカゴの生活に戻ります。シカゴでは数十万の群集の中で自分の知っている人はどこにもいない。ひとつの本質的なものが欠けているのです。それは友人の存在でした。他の人たちも自分のように仲間を求めているとしたら、そこから何かが生まれてくるのではないか。ポールの頭の中に、ニューイングランドの村を思い浮かべながら、ひとつの夢が芽生えはじめます。

このシカゴの街に、いろいろの異なった職業から1人ずつ会員を集め、寛容の心をもって、各人

の意見を認める会を組織してみたらどうだろうか。ウォリングフォード村で経験した助け合いや打ち解けた友情についての計画です。

彼が考えついた新しい計画では、1業1人であるために、あのニューイングランドの村のように自分の職業は、相手の役に立っているのだということ容易に認識することができたのです。次には、もっともっと役に立つにはどうしたらよいかという考えに、この新しい計画に集まった人たちの考えは進んでいったのです。

「ロータリークラブは私の幻想が生んだ子供であった」とポール・ハリスは自伝に書いています。ポール・ハリスの夢が生んだ子は、かくしてニューイングランドの一寒村から大都市シカゴに移り住むことができたのです。ポールの幻想は次々と広がっていきます。アメリカ国内の主な都市へ、それから世界の国々へと彼は魔法の杖を振ります。その杖の先にロータリークラブが次々と誕生していきました。

しかしながら、やがて様々な事情からその夢を見続けることが困難になってきました。昭和6年米山梅吉さんの紹介を受け、弱冠26歳で東京RCに入会した長瀬富郎さんという人がいます。戦前花王石鹸の社長を勤め、戦後は昭和31年から昭和53年まで実に23年間、「ロータリーの友」専門委員としてその発展に尽くしました。その方がこんなことを言っています。

—昔のロータリーは上流の溪谷の美しさであり、今日のロータリーは下流で何万トンもある船が自由に行き来する広さである。今日のクラブのよい点は組織立ってきたことで、それによって文献なども完備してロータリーの勉強がしやすくなってきた。その反面欠点も生じている。そもそ

もロータリーとは何だろうか。ロータリーの根本にあるものは、お互い思いやりの心をもって助け合うことではなかったか。この根本精神は昔も今も変わることはないのだが、その学び方が昔と今では違ってしまった。今の人は文献などを通じて、まず思想として観念としてそれを学びとる。昔は文献などというものも余りなかったから、ただ先輩との交わりのうちにおのずとそれを身につけた。先輩は言葉でなく態度でロータリーの神髄を伝えてくれた。口で教えられたものは口先でまねるだけとなり、知識として与えられたものは頭の片隅にしまいこまれてしまう、ということになり易い。何もかもが形式化し、上滑りしてきたように思われる。—そう述べています。

次に、ロータリーは単なる昼めし会ではない。奉仕の理想を実現する手段として、集まって昼めしを食べるのだということ再認識したいと思います。ロータリーの例会の妙味は、例会に出たならば社長などというつまらぬ仮面は脱ぎ捨てて、ただの人間として出席するところにあります。心のうちにどんなに暗いこと、辛いことがあっても、微笑みをもって会場に臨む。これが秘訣です。虚心担懐無心になれば、人と人との心は通じ合い、世の実相もありのままに観ることができるのではないかと思います。ロータリーの奉仕というものもまた、この神通力から出発しているのではないのでしょうか。かくして例会の時間は魂の慰めとなり、友情は次の1週間への励ましとなります。

ところが世間の人から見ると、奉仕の理想を実現したいのなら昼めしばかり食べていないで、もっと積極的に能率的にやったらどうだと言いたくなるらしい。しかしロータリーの神髄はそれが

「クラブ」であって、社会運動でも道徳団体でもないところにあります。これを理解することこそ真にロータリーが何ものであるかを知る要点だと思います。すなわちロータリーの特性はいかなる場合でも、その理想をロータリアン一人ひとりの人格を通じてのみ実現しようとしていることにあります。ロータリーにとっては、その理想を性急に能率的に実現するというよりも、よきロータリアンをつくるということこそ最も重要な問題なのです。もしロータリーが奉仕の理想を能率的に社会に実現しようとするならば、1年ごとに役員、理事、委員などを改選するなどということは損なことです。しかしこの制度を、よきロータリアンを多数育てようという目的から見直した時、はじめてそれがいかに当を得たものであるかが分かるはずで

す。ひとつ、集団奉仕か個人奉仕かということで、派手な論戦の続いたことがありました。長瀬さんは個人奉仕に重点を置きたいとして、もしも集団奉仕に重点を置くことになると、次のような墮落への道をたどることになりやすいからだ警告を発していました。

第1に、人格の高い人物よりも金回りのよい人を会員に選びたくなる。第2には、クラブの奉仕活動が慈善団体化し、与える人と受ける人々の間の魂の触れ合いよりも、世間的効果を重んじるようになりやすい。

これはなかなか厳しい警告です。しかも現状は残念ながらこの道を歩んでいるように思います。

ここでしばらく、長瀬富郎のロータリー観とも言うべきものをご紹介します。長瀬富郎さんは正確に言えば2代目長瀬富郎です。花王石鹸の先代富郎氏の3男として、明治38年2

月27日に生まれています。初め富雄と名乗っていましたが、跡を継ぐことになって富郎を襲名したようです。彼の初期の文にこんな一節があります。

一番困るのは、宿屋の女中さんなどから「ロータリークラブとは何ですか」と聞かれたときです。2、3分で女中さん程度の人にロータリーを説明するのはむずかしい。そういう時は、私はこんな風に話すことにしています。

—20世紀の初めのことです。アメリカのある殺伐なシカゴの街に一人の真面目な青年弁護士が住んでいました。有名でも何でもなかったポール・ハリスという人です。彼はつくづく銭と争いと駆引きばかりの日常生活に味気なさを感じていました。ハリスは考えたのです。自分の周囲に集まるものは同業者か法律問題の嘆願者ばかりである。友達というものに欠けている。これがいけない。もし業務の同じでない者同士が集まって、親睦を結び知識を交換し、見聞を広め互いに職分に応じて助け合うことができたならどんなに愉快であろう。社会のためにもなるに相違ない。この思いつきを友人に話して賛同を得たので初めて集まりました。それが明治38年2月2日である。最初の集まりはたった4人であった。この小さいが美しい集まりが年々発展して今日のロータリークラブになったのです。

むずかしいロータリーの綱領を述べるよりも、このポール・ハリスによる発端を話すことが、一番正しく世の人々にロータリーの真髄を理解させるのではないのでしょうか。綱領は神学のようなもので、組織立ってはいるが人を動かす力を持たない。ポール・ハリスの話は福音書のようなもので誰の魂にも触れるものがある。我々ロータリアン

にとって最も大切なことは、ポール・ハリスの創設当時の心情に触れることである。――

長瀬さんとロータリー創立の宿縁、そしてポール・ハリスへの傾倒ぶりがうかがえる一文です。

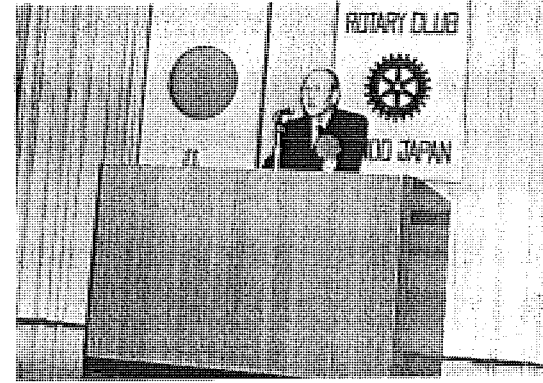
ところがその長瀬さんも東京RCへ入会するときは、むしろロータリーに反発反感を抱いていたのですから面白いものです。

昭和2年弱冠22歳で長瀬さんは花王石鹼の社長に就任します。それを待っていたように昭和6年、米山梅吉と凸版印刷の井上源之丞の二人が、26歳になったばかりの長瀬さんを東京クラブへ入会させます。その時のことを思い出して長瀬さんはこう書いています。

――このお二人は、26歳の青二才を大いに教育してやろうとの親心から、私を半強制的に入会させて下さったのですが、当時の私はロータリーに対してむしろ反感を抱いておりました。ろくな奉仕もしていないのに、口先ばかり「奉仕」「奉仕」といっている金持ちたちの偽善者の集まり、そういう風感じておりました。余談になりますが私の記憶では、米山さんという方は絶対に「奉仕」という言葉をお使いにならなかったように思います。「サービス」「サービス」と言っておられました。漢学の素養の深かった米山さんには、「奉仕」という文字の封建的な重苦しさがおいやだったのではないのでしょうか。

さて、そういう私でしたが次第にいつのまにか、すっかりロータリーのとりこになってしまいました。なぜでしょうか。先輩の方々のやさしい温かい心遣い、思いやりにほだされてしまったのです。――

なかでも特に深い影響を長瀬さんに与えたのは、杉村楚人冠であったようです。楚人冠は朝日



新聞の重役で、徳富蘇峰などとは別の意味での明治大正を通じての最高の新聞人だった人です。楚人冠はロータリーの中で微笑、スマイルということを大変強調しました。彼の作詞によるロータリーソングにもそれが残っています。

世は明鏡の写す影

宿す形をいつわらず

我ほほえめば

影も笑む

本当のロータリアン同士というものは、お互いに顔を見合わせてニコニコする、それだけで対話も何もなくても心が通じ合う、そうありがたいものだといって楚人冠は長瀬さんにこんな昔話をしています。

昔、中国に偽山（いざん）という偉い禅僧がおりました。あるとき自分の部屋で読書していて疲れたのでしょうか、ゴロリと昼寝をしてしまいました。そこへたまたま彼の一番弟子である仰山（ぎょうざん）が入ってきました。先生が横になっているのでそのまま部屋を出て行こうとしたのですが、偽山はその気配で目を覚ました。そして禅坊主らしい難問をもちかけました。「いま俺は夢を見ていた。どんな夢だったか言ってみろ」仰山はしばらく考えていましたが、何も答えずただ丁寧に辞儀をして部屋を出て行きました。やがて洗面具と手拭をお盆に載せて入って来

て、うやうやしくそれを先生の前に置きました。偽山はそれで顔を洗っていい気持ちになっておきますと、そこへまた第二の弟子香巖（きょうげん）が入ってきました。偽山は香巖に向かって、いかにも満足そうに「自分はいま仰山と神通を交したよ」と申しました。そうすると、この香巖もまた黙礼して部屋を出て行き、熱い茶をたてて先生の前に持って来ました。偽山はますます大満足です。

道元禅師は正法眼蔵しょうぼうげんぞうのなかで、この師弟三人のやりとりを大変に褒めたたえ、これこそ真の神通力であり、仏教の神髄だと申しております。平凡な日常生活、顔を洗ったりお茶をすすったり、薪を運んだり水をくんだり、そこにこそ神通力があるというのであります。

長瀬さんに強い影響を与えたもう一人は、海老名弾正牧師です。東京目白駅にほど近い長瀬家に生まれ育ちながら、何故大学は京都の同志社を選び、それも神学部に学ばれたのかと気にかかっていたのですが、それは長瀬さんが少年のころから私淑していた海老名弾正先生からこういう話を聞いていたのです。

海老名先生は九州梁川藩の武士の子ですが、5、6歳のころ寒い冬の朝、お母さんと台所のかまどの前で火にあたっていました。そこへ魚屋が12、3歳の息子を連れて入ってきました。雪はしんしんと降っています。魚屋の息子は素足でわらじ履き、足は寒さで赤くはれあがり、天秤棒で盤台を担いでいるのです。幼い海老名さんはこれを見て、母親に「魚屋の子はかわいそうですね」と言ったそうです。その時、母親は答えました。「あれが魚屋の職分なのです。お前は今、火にあたって暖かそうにしている。しかしお前にはお前の職分があります。お前はサムライの子です。殿

様の命令があれば、いつなんどきでも命を捧げねばならぬのがお前の職分なのだよ」。この一言によって、幼な心に職分の厳しさというものを強く植付けられ、一生の教訓になったということです。宗教家ばかりではありません。政治家でも、教育者でも、実業人でも、己の職分に命を懸けるということに明治の人はすべて喜びを感じていたのではないのでしょうか。職分と職業はニュアンスが違うと思います。たとえば天皇は明らかに職業ではありませんが、ひとつの職分だと思います。昭和天皇は戦争中も戦後も立派に職分を果たされたと思います。その点において大きな敬愛の念を抱きます。日本ばかりではありません。世界的に19世紀から20世紀の初めにかけて、人々の心に一種の理想主義があり、職分（別の言葉でいえば天職）に殉じようとする意気が横溢していたと思います。ポール・ハリスも米山梅吉もその時代に生れた人間だったのです。ところが現代は、職分よりも経営能率をまず考えなければならぬ時代になったと、長瀬さんは嘆いています。

このころからロータリーに向ける長瀬さんの眼差しに少しずつではあるが変化が現れてきたように思います。東京クラブの例会でこういう話をしています。

茶道の祖千利休居士が弟子に対して「茶の湯の盛んな時こそ、茶道の衰えている時と知れ」と戒めています。これはロータリーにとっても大いに心せねばならぬ点だと思います。ロータリーとは何でしょうか。職業奉仕、社会奉仕、国際奉仕、いろいろといわれておりますが、これは要するにロータリー精神のあらわれ、表現であります。利休の言葉を借りるならば、茶の湯にあたるものがあります。それならば、根本である茶道にあたる

ものは何か。それは

——人間にとって一番大切なことは、お互い思いやりの心をもって助け合うことである——という人生観であります。この思いやりという根本精神は、ロータリーにとって昔も今も変わることはないのです。

ロータリーの理念はそのリーフレットを3分間読めば、中学生でもすぐ理解できるであろう。だが、その妙味には永年味わえば味わうほど「曰く、言い難し」ということになる。これは、ロータリーが単なる観念の産物ではなく、いのちを持つ「生きもの」である証拠です。

例会日になると、どうも出席しないと気持ちが悪い。出席するのは出席率のためでもない、講演や食事や歌に魅力があるわけでもない。一種の習慣というよりほかないでしょう。しかしこの習慣は風呂ぎらいの不潔漢に入浴の習慣がついたようなもので、大いに有難いことです。

カトリック信者がミサを受けることに大きな喜びを感じるのは、彼等にあらかじめの準備があるからです。ロータリアンが例会を楽しむにも、まず心の準備がなければならぬ。その準備を怠ってはロータリーの例会の妙味はわからない。

ロータリーの会合に出るときには、心のうちに、どんなに暗いこと、辛いことがあっても、微笑をもって会場に臨む。これが秘訣です。われほほえめば、かげもえむ。鎧を着て風呂に入っては、風呂の有難さは分かりません。

昭和41年、61歳になった長瀬さんは「老」という一文を書いています。「ロウ」はロウでもロータリーには触れない、淡々とした文章でした。——孫を抱いて鏡の前に立ち、孫の顔に比べて、いまさらながら自分の顔のじじむさいのにあきれ

た。60年使い古したポンコツ車だ。だがポンコツ車にはポンコツ車操縦の楽しみがあるはずだ。冬になったら冬を味わうべし。冬になっても、なお過ぎ去った春や夏のたのしみに恋々として無理するのは、あまりお利口さんではなさそうだ。年をとると、驚くということがなくなる。それをさびしがる人もあるが、むしろ、のぼせたり、ムキになったりしなくなる。ということこそ老人に与えられた最上の美德だと考えている。若者は、美人にのぼせて、不美人を顧みることができないが、年をとると、美人も不美人も愛すべき存在となってくる。年をとるとは、広くなるということではなからうか。

「老」とは「大」のこと。人間は竹の子とちがって、上に伸びるばかりではなく、宇宙いっぱい広がっていく存在だ。「老」と「死」とが、いつも仲良く隣り合わせに座っていることも大変いいことだ。死によって自我が消滅し、無限の素粒子にかえてゆく、「老」は有限から無限への渡し守りである。——

「ロータリーの友」が発刊されたのは昭和28年1月です。昭和27年に東日本38RCで第60区を、西日本28RCで第61区とする2地区が実現します。この時2つに分かれた地区の連絡機関が欲しいという話がでて、次の年の「ロータリーの友」創刊となったのです。長瀬さんは創刊間もない昭和31年から編集委員となり、専門委員、副委員長などを歴任しながら、昭和53年まで実に23年間「友」の発展に尽くし、数多くの玉稿を寄せています。

昭和53年、73歳の長瀬さんは、「日本人の心—素直さと寛容さ—」という文を「友」に寄せ、「ロータリーの友」を去ります。

——日本のように忠実にRIの文献を翻訳し勉強

した国はない。日本人の素直さの表れだ。シルクロードの国々のように常に外敵の蹂躪にさらされ、緑のない厳しい自然環境の中では素直な気持は失われる。その点日本は恵まれている。日本人は素直な国民なのだが、それが長所でもあり短所にもなっている。信じやすく主体性と批判精神に欠ける面がある。日本人の勤勉さはアメリカ人のフロンティア精神と純真さ、ピューリタン精神と通ずるところがあるために、日本人はロータリーを理解しやすいのだと思う。ロータリーで一番大事なことは寛容の精神だが、日本人ほど寛容な民族はいない。むしろ甘えといってよい。欧米人の合理主義に対して日本人は情緒的である。外国人は日本人を宗教に無節操無定見とみる。しかし宗教を心の葉と思えば、一つのものを押しつける必要はない。愚かで残虐な宗教戦争も宗教裁判もないのはありがたいことだ。——

ロータリーは、1業1会員という原則を守ることと成り立ってきました。むろん今でもそういう職種で会員となっている方は多数います。何代にもわたって天職として自分の職業のわざを深め徳を磨いてきた会員と、その人とはまったく異なった職種の会員が親しく話し合っている光景は正にロータリーの特色でした。ところが現代は経済の変化する速度が早くなってきた。企業も経済の需要に合わせてはなりませんから、リスクを分散するために多角化をはかって、複数の業種を活動範囲とする企業も増えています。つまり職業分類のボーダーレス時代を迎えたということです。A会員は入会した時の職業だけでなく、時代の要請に従って新しい職種を取り入れ、そちらの方が主たる業務になったとします。しかるに、その職種はすでにクラブの職業分類表にも明記されてい

るとおり、B会員の主たる業務であった。このようなことは無論以前からも起りました。そのために職業分類の修正という項目がクラブ定款にあるほどです。しかし現代は経済事情の変貌する速度があまりにも早いために、クラブ内にいろいろな軋轢を起こす機会が増えているのではないのでしょうか。

長い間、職業分類を考える時の拠点となってきた、俗に赤表紙といわれた“職業分類の概要”が廃止され、新しい職業分類の原則が採択されたのは1967年でした。それまでの大分類、小分類なる語を廃止して、代わりに関連事業というグループで大きく分類することになりました。以後、職業分類の設定に当っては、クラブが自主的に創意考案すべきであるとしたのです。このことは世界中の多岐多様にわたる職業を“概要”1冊では集録しきれなくなったことによるものですが、廃止されたこの“概要”に付けられている職業についての註というものがありますが、この註こそはロータリーの基本的な考え方を示すもので、科学的に準備された職業分類表がクラブ発展の理論的根拠になることを示しています。

それから30年を経て、現在またクラブが1業1会員を維持していくうえで困難な社会事情、経済事情が生じているわけです。会員増強の論議が職業分類を抜きにして“数”だけで論ぜられ、会員数を増やすことだけがロータリーの発展につながるのだという、短絡的な論調が何の反省もなく、何の科学的根拠もなくして世間に横行するようになると、それはロータリーの基本的な性格が一変する時であると、私は恐れている次第です。

不易と流行というのは、たしか俳諧で使われた言葉だと思っておりますが、松尾芭蕉あたりから



出たのではないのでしょうか。まあこれは日本の言葉ですけれども、イギリス人の、世界的歴史家であるアーノルド・ジョセフ・トインビー博士という人が、正にこの不易と流行を歴史学的に解説しています。しかもそれは第二次大戦が終って10年たった日本に参りまして、2カ月間各所で講演をしているなかでこういうことを言っているのです。

文明と呼ばれているものは数世代、何代かにわたって築き上げられてきて、しかもそれはあい受け相伝えられていかなければ文明とはならない。しかしながら文明は同じ状況の下に進展するわけではない。世代が交替するたびごとに、風俗や習慣が変わっていく。ものの考え方も変わってくる。文明というものは親の代から子の代へと伝えられ、受け継がれるたびごとにそういういろいろな変化を受けて、社会的遺産は変わっていく。それは何も、わざわざ変えているわけじゃない。親の代も子の代も、それぞれ前の世代から受け継いだものを、そっくりそのまま伝えようと努力しても、その努力に拘らず社会的遺産、文明というものは漸次変えられていく。そういう事実をトインビーは見まして、伝統というものには断絶があるのだろうか、全く変わってしまうものなんだろうか、あるいは忘れ去られてしまうものなのか、あるいはまた何か政治的に武力的に抹殺されてしまうものか

だろうか、そういう疑問を持つわけなんです。

トインビー博士は歴史学者ですから、歴史のもろもろの教訓を長く数世代にわたって伝えていくことは可能であろうかと、自らに問いかけ研究しました。そして多くの歴史的経験を踏まえたうえで、こういう結論に達するのです。社会を構成している人々の念頭に非常に深く刻みつけられたもの、たとえば戦争の記憶、宗教的あるいは人道的記憶のように、幾世代にもわたって長く記憶され心に刻まれ続け、行動の基礎とされてきた伝統も幾つかはあるのだろうという結論に到達しました。ポール・ハリスによってはじめられたロータリー運動は、その一つに入ると私は考えています。

ポール・ハリスが心の許せる仲間とシカゴに初めてのクラブを作ったのは、「寂しかったからだ」とそれだけ答えています。それは単なるセンチメンタルな発言ではなく、ポール・ハリスの人と人生に対する深い洞察からそういう発言が出たものと解すべきでしょう。だからこそ当時の人々の心に深く刻みつけられ、ロータリーが世界中に広がっていったのだと思います。ロータリーの伝統、ポール・ハリスが言った寂しかったからだというロータリー発生の伝統は、今日も多くのロータリアンの胸の中に生き続けている、静かに流れ続けていることを私は感じとります。

しかしながら、とにかく今は、グローバリゼーションの進展、制度や規則の変化、産業経済の格差、宗教の違い、民族の問題、様々な要素が地球規模に広がったロータリーにも押し寄せています。それがいろいろなプロジェクトとなり、テーマとなりプランとなってくる。おそらく、なにか歴史に先例のない事柄が起るのではないかと

な予想もいたします。この時代において、私たちは何をよりどころにしたらいいのか。そうしますと、トインビーはこれはロータリーについて言っているのではないのですが、こういう時代に何よりも修得しなければならない美徳は、まず寛容であり、次に忍耐であると述べているのです。青木保東大教授も又、トインビー博士と対応した意見の持ち主です。21世紀へ向って文化や価値の違いを尊重しつつ、いかに世界の秩序を形成していけばよいか、いかにして新たな普遍主義や理念を生み出していけばよいかと言えば、これまでは消極的な価値とみられていた、寛容とか他者への思いやり、あるいはコンセンサス主義といったものに、積極的な価値観を与えていくことではないか、と話しています。

たとえば20世紀に起った社会主義思想というよ

うな、非常に強い思想がありましたけれども、それに比べれば、寛容とか他者への思いやりは消極的な価値と見られていたかもしれない。しかし、これからの時代において我々が美徳として持たなければならないのは、積極的な寛容とか他者への思いやりであるんだと。消極的な価値と見られていたものに、今後は価値観を積極的に与えていくことではないか、そういうことを言っているわけでありませう。

ロータリーの中で私たちは寛容の精神を学んできましたが、今やその精神を世界的視野においても守らなければならないときにきているようです。もし私たちが寛容と忍耐を真に学びうるならば、今、その途上におかれてる非常に困難な道を歩み続けるうえで、私たちを力づけてくれる大きな励みになるものと考えます。